

作者について

青山剛昌は1963年に6月21日に鳥取県北栄町で生まれた。鳥取県で小・中・高校をした。後、上京へ行った。日本大学芸術学部で漫画を描く方法を学び、卒業した。

両親は漫画を書くのはあまり良くない仕事と思った。それでも、ずっと漫画のことが好きだったし、すごく勉強したし、結局数々の面白く人気な話しができた。青山剛昌の作品を全部見ると、ミステリーやアドベンチャーのテーマが多いことに気付くだろう。良く知られている作品は、「ちょっとまって」と「まじっく快斗」と『剣勇伝説 YAIBA』と『名探偵コナン』である。1986年、「ちょっとまって」を小学館コミックで出版してから現在まで、週刊少年サンデーと良く人気があったの漫画を出版するできた。青山剛昌の有名な『名探偵コナン』のシリーズは日本ですごく人気を持っている。シリーズは今日から30年ぐらい前に創造された。漫画やアニメも続けるし、日本の文化的な印だ。

作品のあらすじ

漫画『名探偵コナン』は週刊少年サンデーで1994年に始まった。とても人気がある漫画で商業的にも成功した。連載開始から2年後、1996年に『名探偵コナン』はテレビアニメになった。漫画とアニメはだいたい同じあらすじであるから、どちらにも共通するあらすじを説明しよう。シリーズの中の主要な登場人物は四人である。メインフォーカスの登場人物は4つである。主人公は工藤新一・江戸川コナンである。毛利蘭は工藤新一の幼なじみである。毛利小五郎は蘭の父である。灰原哀は重要な登場人物であるが、話の始めではなく、後の方で出て来る。彼らの敵は黒の組織というのものだ。工藤新一と毛利蘭は一緒に遊園地で遊んでいる時、殺人事件を目撃する。事件が終わった後、工藤新一は自分で黒の組織の男を辿った。黒の組織から悪い薬を飲まされて小学生の体の体になってしまう。工藤新一と隣のアガサ博士以外誰もこのことを知らない。アガサ博士は工藤新一に便利な道具を与えた。物語の中で良く使われる道具の一つは声を変化させることができるの蝶ネクタイである。

誰にも自分に起こった事や本当の名前を教えられないから工藤新一は新しい名前江戸川コナンを選んで、毛利小五郎と蘭と住むことになった。毛利小五郎は探偵だから時々事件を引き受ける。コナンは自分の秘密的な方法で毛利小五郎が犯人を見つけるの手伝

う。本当に人を助けたいが、コナンの本当の目的は黒の組織を見つけることである。そして、コナンはもと黒の組織に属していた灰原哀に出会う。灰原哀はコナンと同じ薬を飲んで子供の体になった。二人は一緒に黒の組織のことを探す。シリーズはこれからも続くだろう。漫画は約100冊あって、アニメのエピソードは1000以上ある。それに、映画と登場人物のスピンオフの映画は約25本ある。

引用と説明/分析

「新一とこれっきりもう会えないような。。。いやな予感が。。。」（毛利蘭）。幼少時、蘭と新一は友達だった。工藤新一は探偵の天才だと言われている。蘭はそれが分かるが、時々心配になる。このセリフを言う前に、蘭と新一は一緒に遊園地で遊んでいた。それから、事件が起こった。もちろん新一は事件について警察を手伝い犯人を見つけた。その後、新一は先さきほどを目撃した黒服の人たちを見て、彼らの方へ走った。急に、蘭は一人になった。新一はもちろんいい頭があるし時々考えないで事件へ行く。今回もそれをした。その後、その日、新一はどこにも見つけられなかった。

「真実はいつも一つ」（工藤新一・江戸川コナン）。探偵ですから、目的は事件を解ける、犯人を捕まえるだ。最初から誰が悪いを分かる単純な事件ある。直ぐに誰も何も分かるもっと難しい的な事件もある。情報を全部持っていない時には、一つの解答があるはずだ。時々、たくさんことができる気持ちを持って、自分の性能を買いかぶてから圧倒なことになる。そのばいは、事態に集中するのは難しいし良く考えるできない。一歩下がったら、状況を全部見て答えを見つける。

「言葉は刃物。。。使い方を誤るとたちの悪い凶器に変化する。。。相手の心を察して、慎重に使わねばなりません。。。たとえそれが、どんな相手であろうとね。。。」

(釈蓮和尚)。枝と石は骨を折れるし言葉を私に傷つけると言われているが、それはすべてが正しいであろうか。言葉の使い方を良く知っていれば、問題はない。使う方を良く知らないや注意しないと自分を、誰かを傷つけるはずだ。小さいと詰まらない的なものがよく言葉は強くなるし、人に大切なものとなる。事件の後、何日、何か月、何年ぶり活動を忘れるが相手の言葉やその時抱いた感情はずっと覚える。今にいる間に、相手の心を察する努力して。